

P2-059

食物アレルギーのある児童生徒への対応における学校生活管理指導表の活用状況と養護教諭のニーズ

川内 絵莉子¹、竹田 一則²¹筑波大学大学院人間総合科学研究科²筑波大学 人間系

【目的】

A県内における食物アレルギーのある児童生徒に対する学校での対応を行う上での学校生活管理指導表の活用状況と活用上のニーズを養護教諭の立場から明らかにすることを目的とする。

【方法】

(1) 対象：A県の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に勤務する養護教諭800名を対象とした。(2) 手続き：無記名の自記式質問紙調査を行った。A県学校保健会、A県養護教諭会が主催したA県下の学校に勤務する養護教諭を対象に行った研修会を通じて回答を依頼し、研修会後に回収した。(3) 倫理的配慮：筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た後に質問紙の配布を行った(承認番号：筑28-75)。(4) 分析方法：記入者の属性や選択式の設問は、項目ごとに単純集計を行った。自由記述式の設問については、KH Coder (Ver.2.00) を用いたテキストマイニングにより、記述内容の傾向を分析した。

【結果と考察】

411名の回答を分析の対象とした。現任校は小学校248名、中学校88名、高等学校55名、特別支援学校20名であった。411名中377名の勤務校に食物アレルギーの児童生徒が在籍しており、319校で1名以上の児童生徒が学校生活管理指導表を提出していた。学校での対応を行うにあたり、食物アレルギーの申告があった全ての児童生徒の保護者に学校生活管理指導表の提出を求めているのは121校であり、重篤な症状のある児童生徒の保護者に限って提出を求めているのは173校であった。その他に、3校で「エビペン[®]」所有の生徒のみ」に提出を求めている。学校生活管理指導表を活用する上で、「医師の指示の中で、わかりにくい部分がある」と答えたものは271名であった。92名から困っている内容の具体的な記述が得られた。記述内容から形態素分析によって抽出された語は全352語であり、それぞれの語の出現回数の平均は 3.20 ± 6.51 回であった。最も多く出現していたのは「保護者」38回、次いで「医師(主治医、Dr、専門医、を含む)」31回、「相談」25回であった。92名のうち25名が「保護者(学校)と相談」の指示だけでは「対応」が「困難」であることを指摘しており、学校生活管理指導表を活用する上でのニーズとして、摂取可能な量や運動の程度について具体的な医師の指示を求めていることが示唆された。

P2-060

腎疾患児の入院中と退院後・再入院時のQOL -J-KIDSCREEN-52を用いたQOL評価からの検討-

川崎 友絵、山下 久美子、郷間 英世

同志社女子大学看護学部 看護学科

【目的】

入退院を繰り返し治療の過程をたどる腎疾患児のQOLの維持・向上は、重要な課題の一つである。本研究では、腎疾患児2名を対象に、J-KIDSCREEN-52(こどものためのQOL調査票)を用い、入院中と退院後・再入院時のQOLについて検討した。

【方法】

A病院の院内学級在籍の腎疾患児、11歳、5年生、女兒の2名を対象に、A児は入院中と退院後、B児は入院中と再入院時に調査を実施した。調査期間は2013年6月から12月であった。分析は、各患児の領域毎のQOL得点を算出し、入院中と退院後・再入院時の得点を先行研究(石塚他、2015)の小学校高学年女子のQOL得点の平均値と比較した。

J-KIDSCREEN-52とは：ヨーロッパ開発のKIDSCREEN-52を奈良県立医科大学の地域健康医学教室が翻訳した日本版QOL評価尺度(Nezu S, et al.2015)である。「体調がよく元気でしたか」(身体的幸福感)等の52項目、10領域から成る。KIDSCREEN原法(The KIDSCREEN Group Europe, 2006)に従い、領域毎のヨーロッパでの平均値を50点、標準偏差を10点とし標準化したT値をQOL得点とし、得点が高いほどQOLが高いことを意味する(石塚他、2015)。

患児の入院中と退院後の様子：A児の入院期間は約1ヶ月、主な治療は内服薬、食事制限であった。退院後は順調に地元の学校へ復学した。B児の入院期間は約1ヶ月半、主な治療は内服薬と点滴、食事制限であった。退院後は体調が優れず、地元の学校へは登校できないことが多かった。病状が改善せず再入院となった。

倫理的配慮：病院と大学の倫理委員会承認後、学校長、教師、保護者、患児に同意を得た。

【結果と考察】

高学年女子の平均値より得点が低く差が10点を越えた領域は、A児は入院中2領域、退院後はなく、一方、得点が高い領域は入院中3領域、退院後5領域であった。B児は入院中、再入院時共に低い領域も高い領域も1領域ずつであった。領域別では＜身体的幸福感＞は、A児は入院中38.5、退院後64.3、B児は入院中38.5、再入院時32.7、平均値57.4で、特にB児の再入院時は低く平均値との差が大きかった。腎疾患児は入院中や再入院時に＜身体的幸福感＞の低下があり、全体のQOLに影響を及ぼすことが示唆された。